

アスファルトに囲まれた生活では、雨水が汚染物質とともに川に流れ、河川の水質を汚していく。人と自然とが共存していくためには、本来自然が持つ「濾過」システムが必要不可欠であること、また、アスファルトは人の生活と自然とを切り離してしまう人工物であることから、地域における「不必要なアスファルト」を除去し、地域の緑化スペースやコミュニティーガーデンを地域の人の手で作る活動を行っているのが非営利団体の「depave(ディペイプ 日本語訳 非舗装)」である。

イブニングサイトビジットで訪れた写真の場所は、4年前に駐車場であった場所をdepave初の活動として地域のボランティアによりアスファルトをはぎ取り、土壌を改良してオレゴン原生植物を植えるとともに、地域のコミュニティーガーデンとして野菜を作り、ガーデン横のレストランもその野菜を利用するという、今では地域の大切な財産となっている。



そもそものdepaveの活動のきっかけは、自分の住む家の裏が舗装され、そこに怒りを感じた創設者のアリフ氏が自分の生活、住みよさを高めたいとの思いから、そのアスファルトを勝手に壊したという身近な問題に行動したことが発端となっている。

depaveの運営は、登録ボランティアや地域のコミュニティーなど事業内容により30~200人のボランティア、活動資金は、行政からの補助金とボランティアの寄附、地元会社からの労力や知識の提供で成り立っている。運営には10名で組織される委員会があり、その委員に行政職員も加わっている。コミュニティーガーデンの推進に尽力されている行政職員が加わることで行政との連携もスムーズに図られ、また、政策グループの職員との接点もあるとのことで、現状にそぐわない規制に対し、規制の変更などの要望を行っているという。depaveの活動は、単にアスファルトが嫌で活動しているのではなく、地域において不必要なアスファルトを取り除くために、市の許可を得て、ポートランド市が推奨しているレインガーデンを生み出している。

depave活動の実施は、各地域からの要望を取りまとめ、審査を行い決定する仕組みとなっており、来年度の実施地域の審査が9月から行われるとのことである。事業実施が決定されてから、春から夏にかけてアスファルトをはがし、秋に植栽を行うという1年を要する活動となっている。事業決定の要素は、将来的なビジョンのある人達を応援するために、①半公共的な場所であること、②目に見えるものであること、③コミュニティーの協力が得られること、④貧困層等比較的サービスの受けていない地域であることなどが要件となっており、さらに、アスファルトから緑化された後の管理形態までもがしっかりと審査されることとなっている。緑化することはあくまで手段であり、その後しっかりとその自然が維持されていくことが最大の目的となっているものと感じた。

d e p a v eの活動は「家の裏が舗装されたこと」という、小さな個人的な問題が今では輪を広げ、地域の住民が自然を取り戻すというボランティア活動に主体的に取り組むとともに、行政ともしっかりと連携して活動が展開されている。ボランティアが活動していくためには、「楽しそうでわかりやすい」取組みであること、活動に共感する地域の住民が伴に汗を流した結果が「目に見えること」が大切な要因であることをd e p a v eの事例から教わった。自分も行政職員として、住民が考え、しようとしていることに共感して、ひとつのひとつの主体的な想いを形に繋げられるように向き合っていきたいと感じた。